

# 夏目漱石後期文学の展開

## —「思ひ出す事など」、『彼岸過迄』、『行人』、『心』、『硝子戸の中』における「不定」の軌跡—

立命館大学大学院文学研究科  
人文学専攻博士課程後期課程  
ふかまち ひろし  
深町 博史

本論文は、夏目漱石が1910（明治43）年から1915（大正4）年にかけて「東京朝日新聞」と「大阪朝日新聞」に連載した「思ひ出す事など」、『彼岸過迄』、『行人』、『心』、『硝子戸の中』を対象とし、内容や構想が「不定」のまま進められた執筆過程における各作品の「活動と発展」を研究したものである。

第一章では、〈修善寺の大患〉以後最初に執筆された随想「思ひ出す事など」を取り上げる。当初は病状や安穩とした日々の感想の報告として執筆されていた作品が、連載中に作者が体験した「ヂスイリュージョン」を機に死生の考察や快復後の生活を見据えた語りへと移り変わる展開の中から筆者の問題意識の推移を析出し、その後期文学において問われ続けることになる課題を指摘する。

第二章から第四章にかけては、〈後期三部作〉と称される『彼岸過迄』、『行人』、『心』を取り上げている。いずれも短篇連作形式の小説であり前後半で語り手や中心人物の移行が見られるが、各作品における二人の主要人物に着目し、それぞれの視点から作品分析を行っている。

第二章には、『彼岸過迄』の考察を行っている。視点人物の敬太郎が「冒険」から「人間の異常なる機関」へと興味を移す展開と、そこから順次明らかにされる田口、松本、須永の内面を分析している。殊に須永については後半の語り手として注目し、そこで語られる過去を手掛かりとして「退嬰主義」に陥った過程とその語りの意味を論じている。

第三章では、『行人』を対象とする。他者の話の聴き手であり続けた『彼岸過迄』の敬太郎とは異なり当事者として物語の進展に関わっていった二郎と、妻への不信に苦しむ一郎との関わりから、より複雑となった作品主題の展開を読み解いた。また、作者の病気により当初の構想を超えて執筆されることになった最終編「塵労」も前三編の主題の延長上に位置づけられた。

第四章は、三部作最後の小説『心』を論究している。前半の「私」と「先生」の交流と、後半の「先生」による告白の両面から、長期化された連載において作品が「倫理的」であろうとし続けた「先生」が死を選ぶ必然性を求めて厳格に展開されていった過程を明らかにしている。

第五章では、随想『硝子戸の中』について検討している。『心』を書き終えた後に「行きづま」を感じていた漱石が、この作品の執筆を通じて〈生〉と〈死〉に対する新たな認識を獲得し、それまでの自己を相対させていることを指摘し、その文学上の分節点としての意義を見出した。

最後に、結章では、それまでの論述を踏まえたうえで、夏目漱石後期文学の展開において「不定」の執筆が果たした役割と意義についてまとめている。

# Development of Natsume Soseki's latter period literature -Unsettled writings in *Omoidasukotonado*, *Higan sugimade*, *Kojin*, *Kokoro* and *Garasudo no naka*-

Doctoral Program in Humanities  
Graduate School of Letters  
Ritsumeikan University

ふかまち ひろし  
FUKAMACHI Hiroshi

This dissertation analyzes Natsume Soseki's literary works: *Omoidasukotonado*, *Higan sugimade*, *Kojin*, *Kokoro* and *Garasudo no naka*, which were written in from 1910 to 1915. The purpose of this study is to examine the progress of his unsettled writings.

In chapter 1, the essay *Omoidasukotonado* which was started as a report of the condition, the peaceful feelings, and the daily thoughts is focused on. The examination points the change of Soseki's aim of this writing and clarifies its factors.

In chapter 2, *Higan sugimade* is discussed. The process of changing in interests of Keitaro who is the perspective person and the inner sides of Taguchi, Matsumoto and Sunaga that are discovered by him are analyzes. Then, the reality in the process of changing in Sunaga's life into passive way of living is considered.

In chapter 3, *Kojin* is treated. More complex subject that is brought by Jiro and Ichiro's relationship is viewed and the theme of the last part of the novel *Jinro* that is prolonged unexpectedly is found as the development of the former parts.

In chapter 4, *Kokoro* is referred. It is proved that the novel sought for the reasons and necessities of sensei's suicide though the exchange between 'watashi' and 'sensei' in the first half and the confession of in sensei's will.

In chapter 5, *Garasudo no naka*, is dealt with. The analysis shows that Soseki escaped from his deadlock with the new recognition of life and death which is learned by this writing, and tells that this essay is positioned as the turning point of his literature.

In conclusion, each chapter is summarized, the development of Natsume Soseki's latter period literature are summarized and the significance of his unsettled writing in this period is explained.